

◆【海員随想】丹沢紀行④ 小林信博

気がつくと、すでに新大日まで登っていた。ここで3分程休み、直ちに塔ノ岳に向かう。この辺りにくると、急にタバコの空き箱が目に入ってきた。乾燥しているので、注意しないと山火事にならないとも限らない。幸い私たちはタバコには縁がないので、取り越し苦労かもしれない。

山の緑は個人の財産ではなく、国民全部の財産である。緑は1度失うと、回復するまで大変な年月がかかる。そんなことを考えていると、塔ノ岳の山頂はもうすぐであった。一気に山頂まで登る。時すでに3時20分である。当初予定よりも2時間半も遅れている。

山頂は風が強く寒い。どこの山の頂上でも見ることのできる方位盤と、ある時計メーカーと地元山岳会によって寄贈された日時計も設置されていた。寒いが、喉はカラカラだった。お茶を沸かした残りの水で喉を潤す。冷たい水が乾ききった喉にジーンと浸み込む。この時の気持ちはなんともいえない。自分の足で登った人だけが、味わえる最高の喜びなのかもしれない。塔ノ岳からの展望は、三ノ塔からの展望とほとんど変わらないので、早々に下山することにする。少し西に向かい、そこから左に折れて大倉尾根を下山するのだ。この尾根は、別名バカ尾根といって、大倉口から登る人たちにとっては、非常に苦しい所である。夏には、大学などの山岳部の基礎体力づくりの絶好のトレーニング場である。リュックに石を詰め、登り一方の尾根を炎天下歩かされるのではたまらない。しかし、この尾根を下る途中、父親に連れられた5歳ぐらいの女の子と出会ったが、この尾根を登り、塔ノ岳まで行って帰ってきたということだった。

私たちはただ驚いてしまった。その子にお菓子をあげて、私たちは下りを急いだ。大倉からのバスに乗る時に、列の最後部にその子がいたのにはさらに驚かされてしまった。手編みのロングマフラーを背中まで垂らした赤い顔が印象的だった。

最後に、年ごとに崩壊し、破壊されている丹沢山塊だが、そのために多くの動植物が数を減らしていくのは堪えられない。

発見した多くの小鳥たちも、いつまで安住していただけるのだろうか。

大きな懸念でもある。

「海員だより」